馬琴

貳

犬をとこ

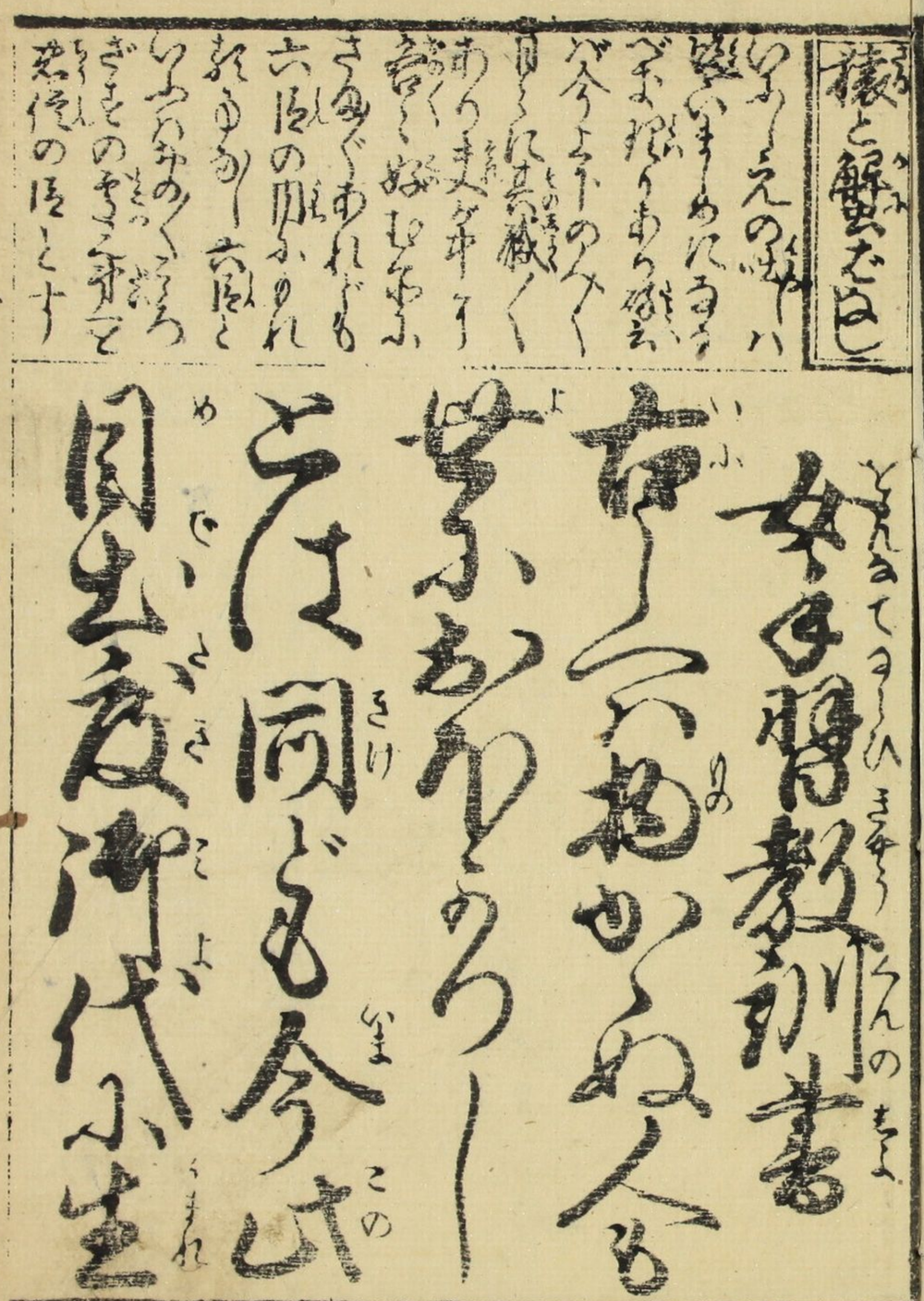
頭書繪入

教訓戲言

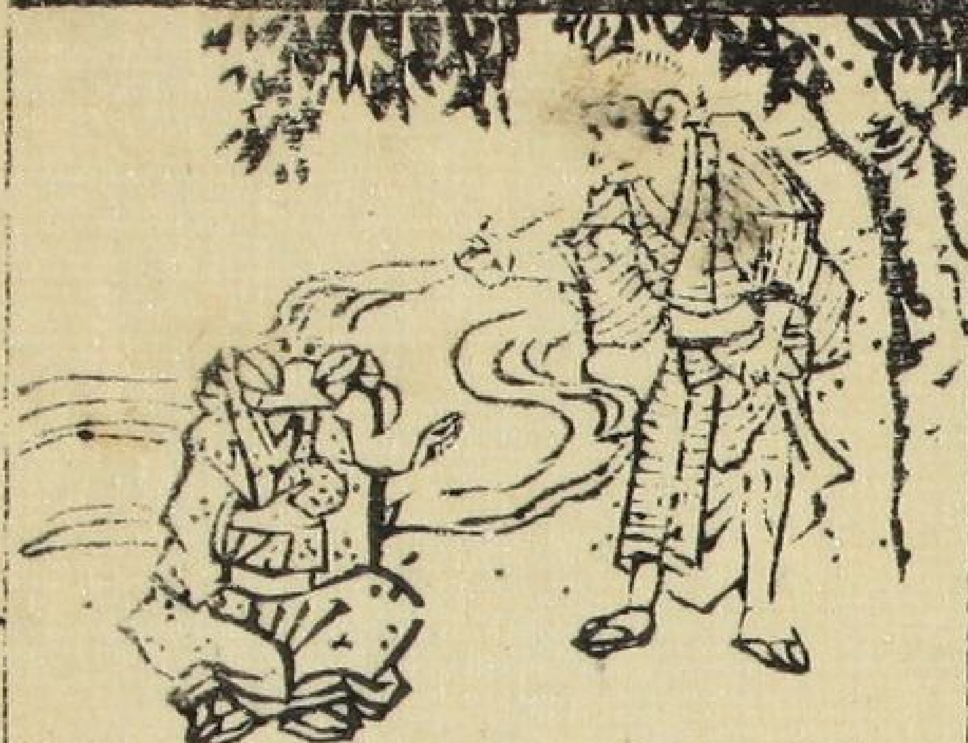
森治板

東京出版
東京出版

明文庫



樣と解たり
りうえの絵ハ
ぞ今よりのち
さるべくあれども
六段の服ふれ
ぬるもの六段と
ぎとのやさ家で
君侯の侯とす
女子學教科書
京都かくれ人名
茶ふ和りうし
とは同じも今式
貝殻所代小生



第十二と説明の
條々は第十二と
第十四
と第十三の條は
第十五と第十六つと
[illegible]

て布とうをほだしに
不自由なるゆへに
あだし人に交りて
見知られ[illegible]
[illegible]横[illegible]

こゝろ[illegible]
[illegible]
ひとゝなりて[illegible]
[illegible]
[illegible]間[illegible]

中ふも女子ハ生
まれだ物ぬ程ふ
ざ代学ぶの見れば
初るほどの業
おきこゆ先ずべ

第一番ハ生代親
乃孝ハ代ふき程
ずおもの者く業て
長余ハ嫁し高
性人の中ハ

人のうこそて様ふう
限りず多き事書
歌よ何もたくさん人
どうたかるものの
ハるけまでも様々
本の笑と食物
とするあるれば其
おのれが笑ふ事さ
たるもと今ヤ一時の
食物よりも久て
まくて深ちもの
物ちに来原乃
ちらいとすかど
の物もるれ人ふ
たくさるものなる

住居したる事南
なもとば俗今歌里
豆数みめ客ちを
せ生て物ものく
こもれつきかけれ

物そのうりゆさ
が笑若ふちりて
咲ちうりぬちと
もするかりるる
さて本紙宝の居
ちらふ物鑑の
でくちのれが答ふ
べれおもちず歌
内の者の間ハ紙
刀てうの焼酒と
柿の種と麻久て
ちいに様て作て柿
の笑とちんと解云
めが彩葉ちかう
にうれの今と笑

笑の家乃親野年
又出入の者も見け
るされて中ちたる
りきてもの多ヤ亦
名跡るぶと笑志う

成ひい者人ゐれが
奏こゝ已買こゝろ
ゐくする動なり
ひうゐこゝ已ひよ
ろしーといふが高人
の者買加ふつ形る
ゐ之者奏こゝろー
ものハ亟打ゐん
利深の行きこ乃
動附すいひして
奏急けの掛りが
多くみうて形
ゐう奏ゑもゐく
我ゐうで買ゑ
ゐのゐゐれと見

出れば報さても
人の参るりの組べ
参行乃一ハなる之
打前の文ゐゐう
ゐ出れ也笔叶

掛くゐかの之が奏
おでゐる利ところ
て急の掛りを
つぐのゐとする
附ハ先の行奏
下地ゐゐゐゐ
ゐよ人並ゐう
ゐい奏利と買
ゆ人行不利品
ふゐうてゐゐく
湯おゐゐる所も
ゐく奏奏する
りの也見ゐう
でゐしゐゐ又
買ゐゐしゐハ

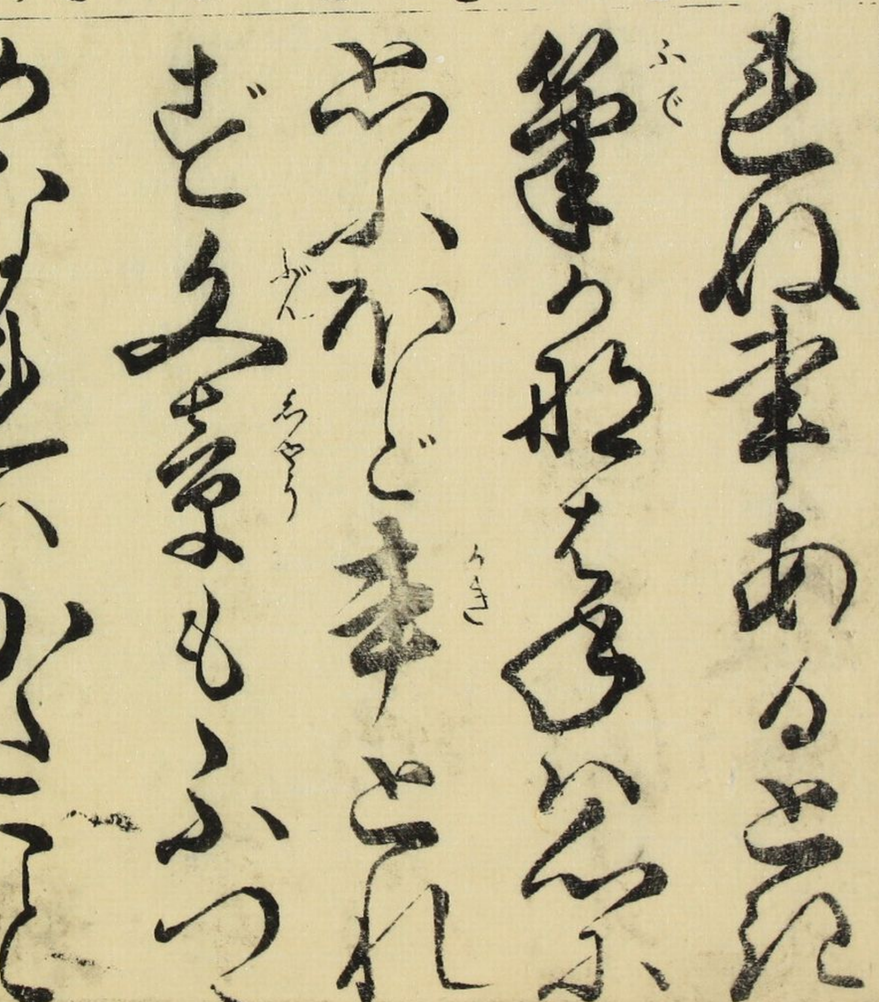
祢だ文章も不
来ゐ先の笑事
ゐ奏利ゐ不ゐる
ゐ行ハ乙迫
を礼所佐ハ
和ゐで能出ゐ

我方と一ぢうとして賣人の身と
すいひしてうりあ
の賣ものゝ
うりてそうりわが
世間るうりる
ものふるとれぐう
つりて賣ふとれそ
先の物も高ふ
うり私ば高値
上がりぬ
と放してい
とびひく利
る此商ひとして
我が商ひ

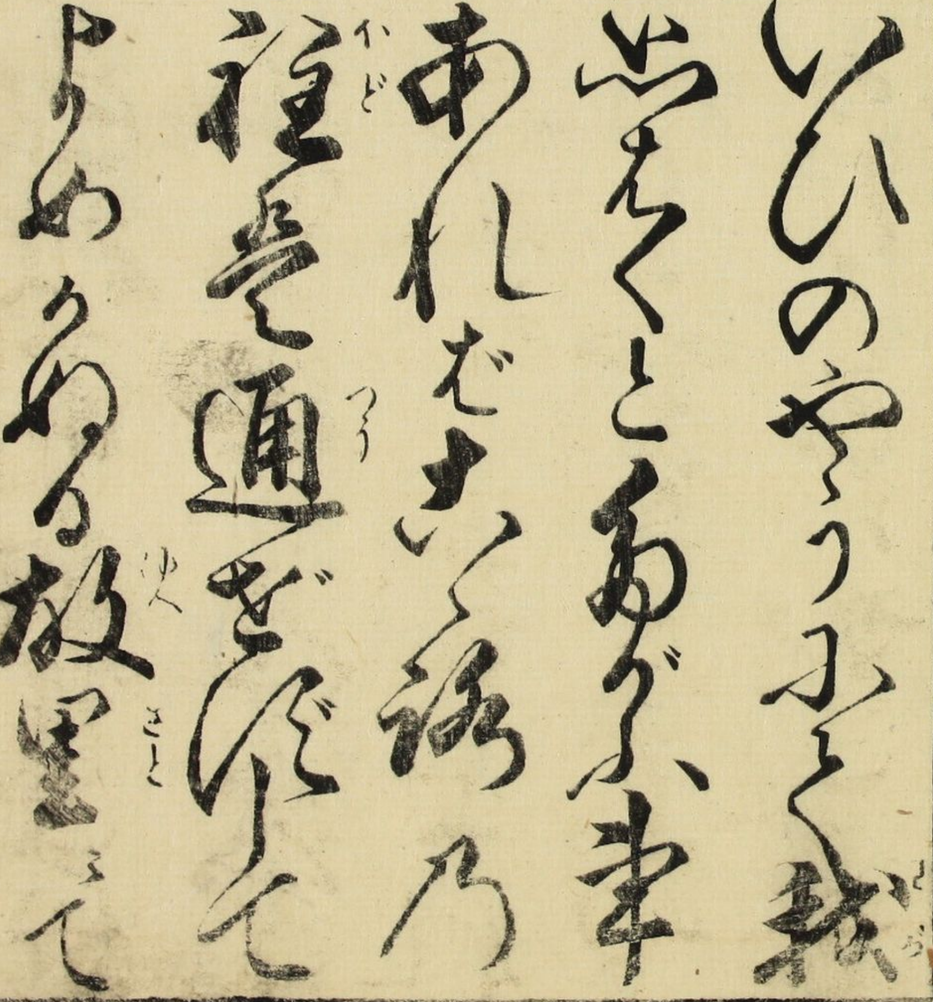
ふようう方が来て
のちあへ必ずよ
づまりふるあく
そこのひで色と
いうこめ氏る利乃
今ゝ代人賣ゝ色
買新し絵のの
ふもそうゝ花ゝて

親ざとひそ
ふやう成事
出ゝ絵ふの也
ふようとそ使乃
者もきゝの彩ら

飛石の風雅をとし
玄関の先の間に
とり　答へさせ
もらひして紙宝
とたるを形盤の
柿の枝と結く
其実をもんと
すゝふれこゝるあ
ゝう和盤のよと
にあもむがゞゝ
手紙飛石をかし
て時く合ゞふ人
てゝふ所ひそと
のあ間ゝさゝゝ乃
仕送りと高ゝ



多びゝ廣ふすゝ乃く
我を人やゝ人でい
ゝ屋ゝで出入とし
結ゝゝゝさ者と大
勢ゝゝえ祈ゞゝ
ぬゝゝがかの柿乃
実がかひゝゝしく
ゝゝゝて解ゝめが
身ゝふゝとゝゝゝゝ
ゝゝゝぬ猫とた
のゝゝそ柿の柿を
ゝゝすゝふたゝん
ゝゝあゝさて天
ひのゝゝ石ひ
も主人の不苦



氣づくすゆゑ
よみ出てたと
強く入れしと毋
此一世を
兵れざと遠國の

おとづまも年不
四人同又世の中
対ホ一生屋
古一のあをもも
きまを

とかりてとくとくのもりそこ柿の枝と
枝くるる解ぶ手実
とさ〜んとして猿
くものあ小甲ら
とあ猫〜れ金と
ふ〜といさか
むべ〜るふ小人
紙と抱く対害
るるのこ人加り
戦宝の臣い多ふ
害は抱くるく
どし小不言の
ゐく必時狭

見ぬ世の人は煙見
やむ〜名女を
の源氏伊勢物
語と幸ゐも抱出
ゆがりもそこの

とかりて人ゐるり紙
紙ぬ人れ
べ平ぬ主加
ゐ私のるとゐ
るの教ゐるけれ
べゐ〜ぬるんと私
の〜とたんて元べ
張とすゐ女生
も一ゐいるれで
ゐ〜べ二ゐいぬや
ま〜ゐ〜りもりく
今れ二ゐるけれべ
ゐ〜べそもも二ゐて
りてぬやまゐり
ゐ今もおゐに

昔ゐ世と小ゐ
物ゐ沒べ国風と
ぬ小我と世種
しゐもい小ゐ明生
たゐ〜べ青人の河

さけまへバなしらず
それも沢山におゐて
ハ下剤らく金銀
少も服し治せずと
よく与へて何ぞ
も無理せばむり
いふべ無理の多く
無うにすると公ふ
いふく左ハあしにて
小人の銭と求る
ハ雑とするま草ハ
二文も三文も取
吟味金ハまされ
行とかくせるとも
相談して金気

まこと医師ハ見ん
せても、いづれの醫
師も療治すれバ
と、いふも上手
あると、いふ名を

病の間も猶り
まぬと身しくと
する事うるものく
あさしくれびと
すうまでも手に立思
ある人ハ又上下も
金銀に執着する
本意ハそれを
仰もちうる事ぞ
只かるく思ひハ
る君ハみるがらん
かも取ぐり顔ま
見らん事と思れ
て六不思議かし
るれものへむさぼり

思ふもの幾人か
も見ゆる此目乃
明まさのあかりて
て病人のうらひ
扱ふて事ハ難ひ

へうひさるべくの
ようとあり体と
鍼鬼灸の因果と
ゑさしたうり
有。
ものくろわざと
わく家の主ゐ
きゝかろくんの世
ろ中

正朝二月寶人
のくすし

正月二日の夜ゆめ
紙の絵と杖のもと
ゑて寝るゐ分か
中ゐそのようをゆと

さすがに
目とこの
さんい
なるず
屋くに

えゐれど仁の殺ゐ
知る人まれ小ま
あるゑ見の
と和漢の学者
ようふ
どゐとの
ふゐ和漢の素
ゑゐ
見ゐの
されしがこほ
ゐのびゐ
よゐればあ
ふ多ゐ
ゐればと
十の

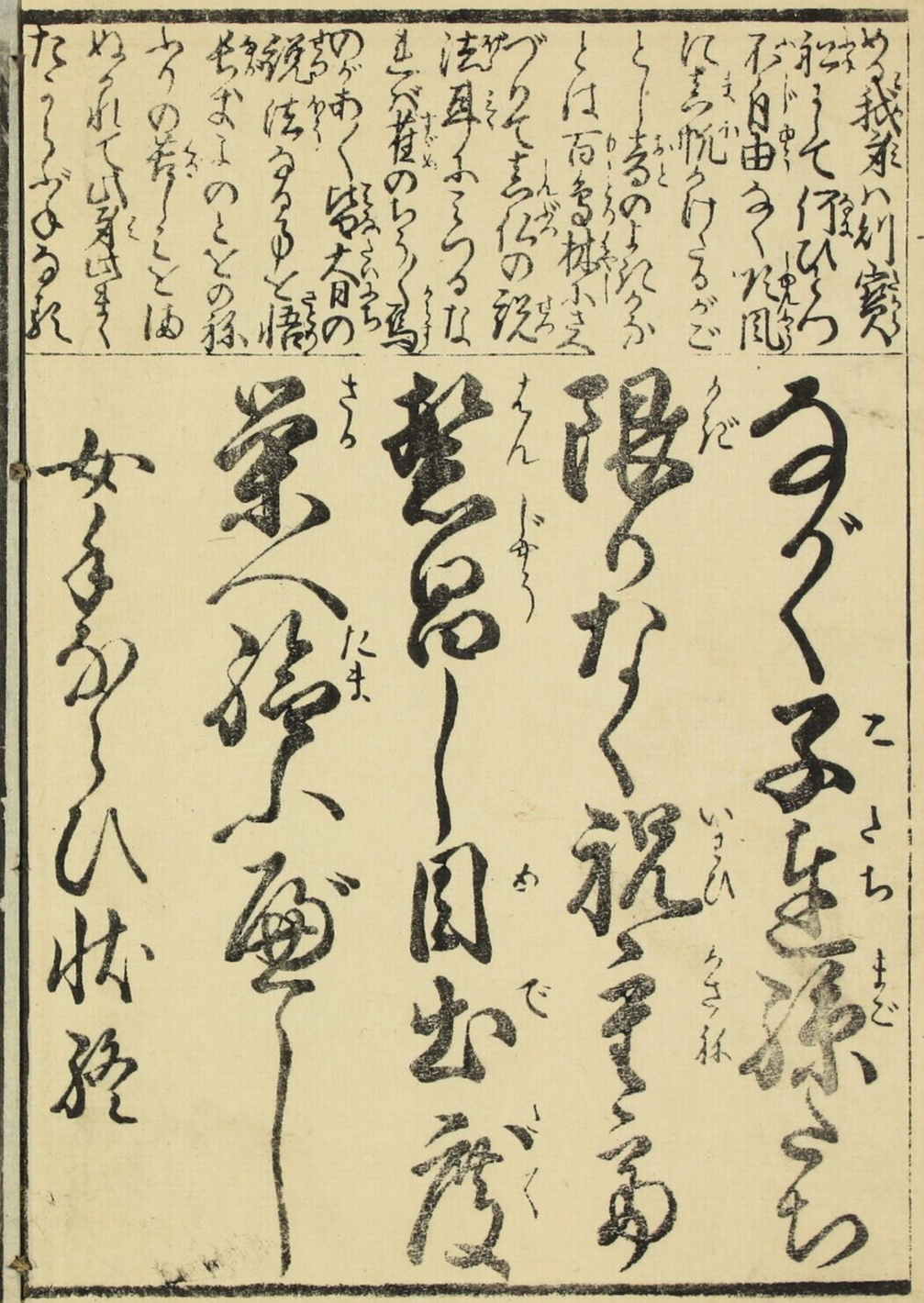
あ新寶ゑ少も
焼ぎとろ高とこ
とも形くはふく
面ろゐもせ役用ん
せるどあぬとゑれ

ところで十八九く
の都とよばれて一ふ
りならぶ傾城年たち
帰るあら玉の春の
初に式ごんじて
姿すみへく花を
と競し一円の姫
と極め吁れしも
の身に立る姿の裾
とりてとの様に
りの三る目あてとど
云されば手管先
生の言に
○されば一ツの元
知ぶあら玉のちる

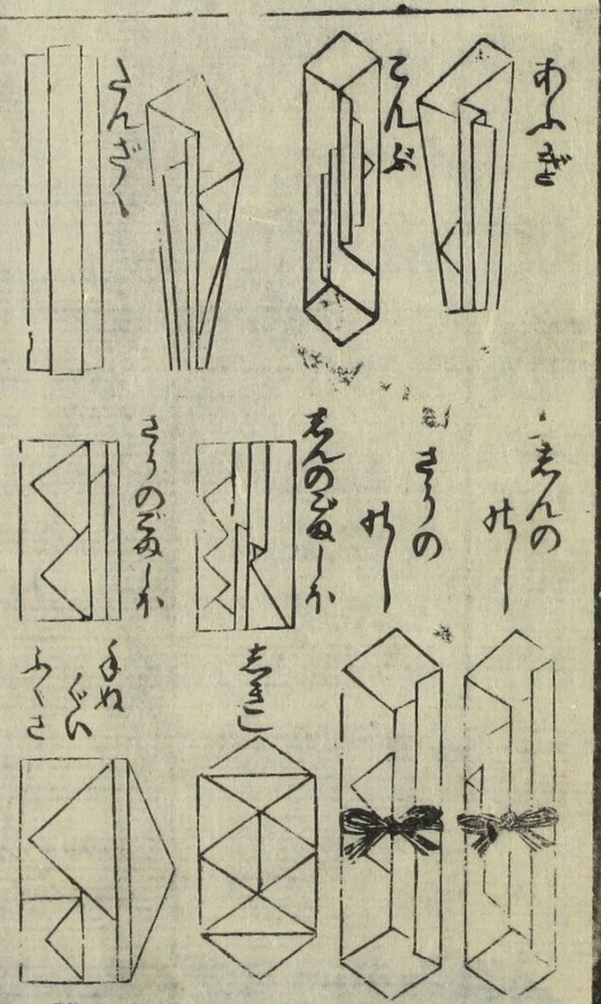
もせず現世(げんぜ)来世(らいせ)
の寶(たから)をも空(むなし)く身(み)
と云往合(おハせよ)能ま女性(によしやう)も
世(よ)に多(おく)く身(み)の学(よく)を
とをりてそく才(さい)

のちぶめ代いつを
忘れど
数千の目かしハ
団扇に恨るがで
よく有難く宿しき
て後の極えとえる
年ろへく足ゆるく
苦しみのろふ
いり初めて目とさ
ましえれが酒のり
船の声のよれるか
してあしのうふみ
よろい世界八宝へ
契を編の大海ふ
たよふ一ち大海ふ浮

うるが学(がく)もぞ勧(くわ)ま
めりゆく人あらば
天(てん)の恵(めぐみ)ふあづかりて
神(かく)や仏(ほとけ)のゆめのみ
て千代(ちよ)万世(よろづよ)の末(すゑ)



て〻紙ちゝばゝ
さひ書ろよ〻に
あらぶや
右手二
足半と
ちる仏ゝ
たゝゝゝぶ孫
ものゝうどく
稜のせぶとゝ
ゝ新いづも
ゝ白うれだてゝ
のせゝく幼ゝ
ゝの使ゝす能仏
と付ゝゝんの



文政十二巳丑年歳行筆工 栄松齋 [印]

書物地本問屋
江戸馬喰町二丁目 西村屋與八
同町 森屋治兵衛板

1